

男の作法

高齡者文学人生論

池波正太郎 (1923-90)

『男の作法』 (1981) 「ごま書房」

『青春忘れもの』 (1969) 「毎日新聞社」

『私が生まれた日』 (1996) 「朝日新聞社」

『芝居と映画と人生と』 (2008) 「朝日新聞社」

「自分は死ぬところに向かって生きているんだ」と、なにかにつけて考えていればいい

池波正太郎は平成元年三月、急性白血病で三井記念病院に緊急入院し、五月三日に息をひきとつた。六十七歳。

昨今のような高齢化時代では早すぎる死のような気もするが、還暦はすでに過ぎており、当時の著書『男の作法』では、「たとえ今晚死ぬとしても心残りはない」と、言っている。「自分は、死ぬところに向かって生きているんだと、なにかにつけて考えていればいいんだよ」。

それから七年後、『仕掛人・藤枝梅安 梅安冬時雨』と『鬼平犯科帳 誘拐』の連載中の急死だったが、心残りはなかったはずだ。

池波正太郎が生まれたのは大正十二年一月二十五日。子供のころは絵を描くことが好きで、将来は挿絵画家になって生きて行けたらどんなにいいだろうと思っていた。小学校を卒業すると、十三歳で世の中に出て、株式仲買店で働きはじめたから、画家になるどころではない。

ところが、戦後に、芝居の脚本を書きはじめ、さらに師の長谷川伸の強いすすめで小説も書くようになり、芝居でも小説でも成功した。そして、自分の本の装幀や挿画が描けるようになった。子供のころの夢が実現したのである。

「人間は死ぬところに向かって生きている」と



男の作法

—— 高齢者文学人生論

いうのは古代ギリシアの哲学者ソクラテスの考えに近い。池波正太郎は江戸っ子のソクラテスだ。

「何よりも大切にしなければならぬことは、ただ生きているということではなくてよく生きるということである」とソクラテスは言った。よく生きた日本人の代表は私が著書を通じて知っている限りでは池波正太郎の名がまず浮かんでくる。

よく生きるためにはどうすればよいか。死ぬところに向かつて生きているんだと、なにかにつけて考えればよい。そうして、みがくべきことに、男をみがく。自分の人生が有限であることを知れば、自分のまわりのすべてが、自分をみがくための「みがき砂」だということがわかる。

男の顔をいい顔にかえていくということが、男をみがくということなんだよと、池波はいう。

口でいうのはたやすいが、凡人には池波のような生き方はむずかしい。「若いうちに、やるべきことをやっておかないとだめなんだよ」といわれども、池波の行年よりも長生きをってしまった高齢者には無理だ。それに、『男の作法』は『女の作法』とは違うかもしれない。

したがって、『男の作法』の読者は還暦未満の男にかぎられるが、自分は死ぬところに向かつて生きていると何かにつけて考えるというだけのことなら女や高齢者ものぞみなきにあらず。

誰人か手向けし菊や地蔵尊

池波正太郎